デンマーク近代国家の成立とグルントヴィの教育思想

Founding of Modern Danish Nation and Educational Philosophy of N.F.S. Grundtvig

文学研究科教育学専攻教育学専修博士前期課程修了
灰　垣　春　奈
Haruna Haigaki

序論

１．はじめに

村井は、教育は「国家の国益のためのものではなく、国民個々人の人間としての生き方のためのもの」であり、それは「相手を人間として『善く』しようとする働きかけであるから、教育する側では、とうぜん相手がみずから『善く』生きようとしていることを知り、且つ信じていなければならない」と説明している[1]。しかし、近代学校が成立して以降、人々は教育とはどこか、学校において“国益のため”に国家が決めた“よさ”を教えることである、という感覚を持つようになったのではないだろうか。筆者自身も、そのような感覚を抱き、というよりも、国家に（または他人に）押し付けられた“よさ”を当たり前のものと受け取り、それが本当に“よい”のか、ということを問わなくなっていたように思う。例えば、近年、国際学力調査（PISA テスト）の結果が盛んに報じられ、日本はその順位に応じて右往左往し、その教育の方向性を変えてきたといえる。しかし、国際学力調査で上位をとるための教育が、子どもにとって“よい”教育だと言えるのか、また順位をあげることが果たしていいことなのか、それは誰にとっていいのか、なぜいいのか、などということが問われるようなことはない。そもそも、学力を国際的に点数によって比較することへの限界についての議論もあるが、国内の全国一斉学力テスト等に関しても同様のことが言える。“子どものため”を謳った教育が、いつしか“国のため”の教育にすり替えられてしまっているのだ。

しかし、そのような学力調査の結果を受けても、しかも、その結果があまり芳しくなかったにもかかわらず、日本とは異なった態度を示している国がある。それが、デンマークである。デンマークは、

[1] 村井実、『教育と民主主義』、東洋館出版社、2005 年、203 頁

国際学力調査において OECD 諸国の平均程度の結果[2]であったが、日本のように大騒ぎにはなっていない。無論、その結果を受け、様々に議論は展開されているが、それが直接短絡的な教育改革にはつながらない。デンマークは、ヨーロッパ連合（EU）に属しながらも、それでいて独自の路線を展開しているといえる。たとえば、貨幣もユーロ（Euro）ではなく独自のもの（デンマーク・クローネ：DKK）を使用しており、教育制度においても、独自の制度を有し、教育大国・福祉大国として知られている。しかし、デンマークで重要視されている教育は学校教育に留まらず、より広い意味での、村井のいう、“よく生きようとする人々”の生を助ける行為を指しているように感じられる。そのようなデンマーク社会において、人々の生活に大きな影響を与えたと言われているのが、グルントヴィ（N.F.S. Grundtvig）である。

２．研究の目的

「デンマーク近代教育の父」と言われるグルントヴィが生きた当時の時代背景について、特に、ナポレオン戦争、スレースヴィ（Slesvig）戦争での敗戦により史上最小となったデンマークが、農業国家としていかに国を復興させていったのかを考察し、その中で、グルントヴィの宗教観、教育観がどのように成立したかについて研究することにより、独自の性格を有するデンマーク近代国家の成立とグルントヴィの思想との関係を明らかにする。中でも、グルントヴィの中心的な思想である、“生きた言葉（Det levende Ord）”と“国民性（folkelige）”といった理念を深く理解することによって、彼の教育観や人間観を模索することを目的とする。

３．研究方法及び本研究の範囲と限界

本研究では、グルントヴィの思想を理解するため、グルントヴィの著作については、以下の２つの英語の文献を中心に議論を展開する。

① Edward Broadbridge. *The School for Life: N.F.S. Grundtvig on Education for the People.* Aarhus University Press. (2011).
② S.A.J. Bradley. *N.F.S. Grundtvig—A life recalled.* Aarhus University Press. (2009).

これらの文献は、決定版の英語の翻訳であるため国際的に信頼性が高く、デンマーク語の原典に比べて註が充実しおり、筆者が基礎的な知識を有さない北欧神話やデンマークの古代史などについての

[2] Comparing Countries' and Economies' performance. http://www.oecd.org/dataoecd/54/12/46643496.pdf（2012年１月４日）

理解を助けてくれるものである。

さらに、グルントヴィについて書かれた英語の主要な文献は、その殆どを参照している。

４．用語解説・語句の定義

国民高等学校（フォルケホイスコーレ、FolkeHøjskole）

グルントヴィが構想し、その弟子となるグルントヴィ派（Grundtvigianism）の人々が設立した、デンマーク特有の教育施設である。国民高等学校は現在、デンマーク国内に 100 校程度存在し、義務教育を終了した者なら、性別、年齢、障害の有無、国籍などに関わりなく、誰でも入学することができるが、資格や試験とは無縁の学校であり[3]、日本人の考える学校とはかなり性質の異なるものである。日本語では国民高等学校と訳されているが、これは高等教育機関であり、日本の高等学校（中等教育機関）と混同されることの無いように注意しなければならない。

スレースヴィ（Slesvig）

デンマークのユラン（Jylland）半島南部に位置する地域の名称で、1920 年以降、現在にいたるまで、北スレースヴィは、住民投票によってデンマーク領に戻されたが、1864 年のプロイセンへの敗戦により、ドイツ領となった地域である。この地域をめぐるデンマークとプロイセンの戦いは、スレースヴィ戦争として知られている[4]。

愛国思想

グルントヴィは、自身のデンマークへの愛を“特別な愛（Partiality）”という言葉で説明している[5]。また、彼の中心的思想の一つとして“Folket（国民）”の概念があるが、これらはいわゆる“愛国心”とは異なり、別の言葉を使っていうなら、“国（デンマーク）への愛”とでも呼ぶものである。前者が自分の国のみを愛する、という排他的な考えを含んでいるのに対して、後者は、自身の国に対する誇りなど、あくまで自然な感情である。グルントヴィの愛国思想も、後者に属するものであると考えられる。

---

[3] 寺田治史・白石大介、「デンマークにおける教育事情（II）―『生の教育』の実態を垣間見る―」、武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科研究誌 第 5 号、1999 年、187 頁

[4] 橋本淳、『デンマークの歴史』、創元社、2004 年、167 頁

[5] N.F.S. Grundtvig. “The Danish Four-leaf Clover or A Partiality for Danishness”. (1836). Broadbridge. *The School for Life,* p.128.

Ⅰ．デンマーク、ヨーロッパの歴史的背景

グルントヴィ（1783～1872）が生きた時代、ヨーロッパは激動の時期にあり、むろん、デンマークにとっても、大きな変化を伴う時期でもあった。本章では、グルントヴィの教育思想の形成及びデンマークの近代化に関係の深い事柄に焦点を当て、当時のヨーロッパ及びデンマークの時代背景を考察する。

１．宗教改革

宗教改革は、グルントヴィが生まれる２世紀半以上も前の、1517 年、ドイツでマルティン・ルター（Martin Luther）がローマ教皇庁の免罪符の販売を批判して「九十五か条の論題」を発表したことにより始まり、その余波はすぐにデンマークにも伝播するが、ここで宗教改革の成果として注目したいのは、自国語訳聖書の出版である。

デンマークにおける最初の自国語の聖書は、1550 年に出された『クリスチャン 3 世欽定訳聖書』である。グルントヴィは、この 16 世紀の宗教革命の果たした国家的、市民的影響は、「自然権（natural rights）を持った母語を確立した」[6]ことにあると説明している。宗教改革においてプロテスタント側が主張したのは、聖書の地位を高めることであり、それは一方で、聖職者を通して神の声を聞くということを否定することであった。そこで、その大切な聖書を庶民が自らによって理解するために、聖書の翻訳が必要となり、それに使われた言語が母語として確立していった、という意味をもつのである。

２．国家主義と民族主義

グルントヴィが生きた 18 世紀後半から 19 世紀にかけては、ヨーロッパ中で、国家主義が台頭し始めた時であるが、そこには未だ民族主義の色合いが濃く残っていた。小泉は、社会主義改革を推し進めたマルクス（Karl Marx）やエンゲルス（Friedrich Engels）も、彼らの思想の根底に、民族主義的な考えを持っていたと主張している。さらに小泉は、フランスの二月革命とそれに伴うヨーロッパにおける種々の革命について、次のように説明している。

> それは結局民主主義革命か、民族主義革命か、或いは民主且つ民族主義革命の動乱であった。フランスの場合は、社会的色調を帯びた民主革命であって、ここでは民族主義は問題に

[6] N.F.S. Grundtvig. “The Danish Four-leaf Clover or A Partiality for Danishness”. (1836). Broadbridge. *The School for Life,* p.158.

ならなかったが、ドイツで求められたものは、自由と統一、即ち専制主義の排除とドイツ民族の統一とであり、イタリヤでも同様であった。即ちこの二国では、愛国者は即ち民主主義者であって、国民の統一、独立とその政治の民主化とは、殆ど不可分なるものとして希求された[7]。

そのようなドイツの状況は、隣国であるデンマークにも大きな影響を与えていたことは、想像に難くない。

３．デンマーク国内の状況

① 農民の解放

当時のデンマークは、いまだノルウェー、スレースヴィ（Slesvig）、ホルシュタイン（Holstein）を有する大国であり、貴族や上流階級が支配する農業王国として発展していた。人口の８割以上を占めていた農民たちは、1788 年の土地緊縛制度（Stavnsbåndet ophævelse）の廃止により、1733 年からの束縛から解放される。そしてその後も、囲い込み、農村集落の解体、賦役の制限、土地の分与などの農地改革が次々と実行されていった。

② 敗戦の経験

ナポレオン戦争やスウェーデンとの戦いに敗れたデンマークは、1814 年１月５日、国家破綻を宣告。さらに、１月 14 日のキール条約により、ノルウェーをスウェーデンに、ヘルゴラント（Helgoland）をイギリスに割譲することとなる。

③ 義務教育制度の確立

同 1814 年、７歳から 14 歳までの子どもを対象とする、民衆学校（almueskolen）での義務教育が制度化されている。デンマークは他のヨーロッパ諸国に比べても、比較的早い段階で義務教育を導入している。

④ 絶対王政の終焉

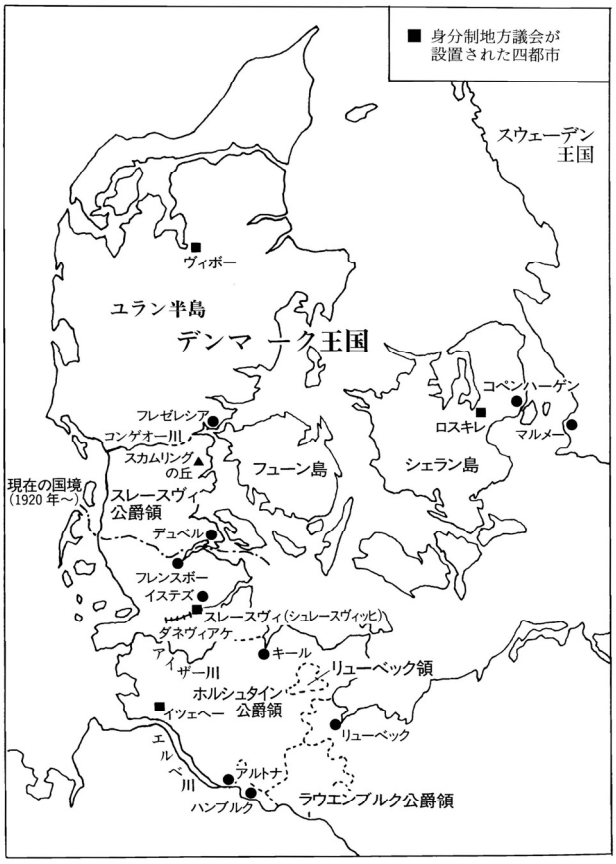
1848 年を境に、ヨーロッパ各地で暴動が起こり、民主化の流れがより勢いを増していく。デンマーク国内でもヨーロッパ情勢を受け民主化の勢いが増す中、フレゼリク７世が即位するが、３月 20 日に開かれた集会で採択された宣言により、革命の気運は最高潮に達し、翌日には１万 5000 人の市民

[7] 小泉信三、「民族と階級」、『共産主義批判の常識』（『小泉信三全集』第 10 巻（文藝春秋社、1967 年）所収、110～111 頁

が王宮へ向けて行進デモを行い、国王はその要求を承諾した。こうして、デンマーク絶対王政は、無血のうちに終焉し、翌年の憲法の制定へと向かうことになる。

⑤　スレースヴィ問題

「デンマーク人とドイツ人が混在するという民族的な問題が深刻な様相を呈しはじめて」[8]いたスレースヴィでは、デンマークの精神や言語を支援する動きが高まっていった。そのような状況の下、無血革命により絶対王政が崩壊した 1848 年４月、デンマークは、その後スレースヴィ戦争で敗戦。10 月 30 日にウィーン条約を締結し、その結果、ホルシュテインはもとより、スレースヴィも奪われてしまう。北部スレースヴィには、デンマーク語を公用語とする住民が多くいたにも拘らず、1920 年に住民投票が実現するまではプロイセンの全スレースヴィ統合は続き、デンマーク人居住者は多くの苦難を強いられることとなったのである。



デンマーク王国と公爵領

（橋本淳、『デンマークの歴史』、創元社、2004 年、157 頁）

[8] 橋本淳、『デンマークの歴史』、創元社、2004 年、160 頁

Ⅱ．グルントヴィの宗教観

グルントヴィは以上のような激動の時代の中に生きてきたが、その過程で両親、コペンハーゲン大学時代の経験、ロマン主義、訪英での経験などから多大な影響を受けながら、独自の宗教観を形成していった。では、彼の宗教観の特徴とはどのようなものであるのか。

１．グルントヴィの歴史観

グルントヴィは歴史について独特の捉え方をしており、彼の宗教観を知る上では、この歴史観について知ることが不可欠であるように思われる。そこで彼の宗教観について考察する前に、まず、グルントヴィの歴史観について概観する。

グルントヴィはその生涯で、“Northern mythology”、“Handbook of ancient history”、“Handbook of medieval history”という３つの歴史書を書いている。そこに見られるグルントヴィの歴史観の特徴として Kemp Malone は、①宗教的（キリスト教的）であること[9]、②愛国的であること[10]、と説明している。

さらにグルントヴィは、個人の人生を３つの段階に分類し、それを歴史の変化に対応するものであると考えている[11]。

①幼少、青年時代：古代

空想（fancy）の時代。試行錯誤を繰り返し、様々な夢を描き、想像力に溢れる。

②成熟：中世

感覚（feeling）の時代。衝動や動機が集中し、好き嫌いが始まり、選んだ要求に献身する。グルントヴィはこの時代を、暖炉が最も燃え上がっている状態であると説明している。

③老年：現代

反省（reflection）の時代。身体的な力を失い、行動よりも熟慮の時期で、平穏や安穏を好み、思い出や思考の中に生きる。

グルントヴィは、彼が生きた当時はこの第３段階に当たる反省の時代にきていると解釈している。中世は苦難の時代ではあるが、同時に信仰がしっかりと保たれていた時代であると考え、当時惰弱な

---

[9] Kemp Malone. “Grundtvig’s Philosophy of History”. *Journal of the History of Ideas*, vol.1. (1940), pp.281-282.

[10] 同上、pp.282-283.

[11] 同上、p.286.

状態にあったデンマークを立て直していくためには、信仰の問題が外せないとして、教会の改革を訴えた。さらに、この第３段階、つまり、人生においても歴史においても反省（reflection）の段階にある今、教育によって愛国的感情を子どもたちに養わせることを重要視したのである。

２．グルントヴィの宗教観

コペンハーゲンに移ってからのグルントヴィは、啓蒙主義的な宗教観にも影響を受けていたが、1810 年に精神的衰弱状況に陥って以降、その宗教観に変化が生じ、その後の著作（普遍的キリスト史 “Brief concept of World Chronicles”）は、コペンハーゲンの教養階級を激怒させることになる。

グルントヴィは、当時の教会観に反し、信仰は経験の中で高められるものであると考えた。つまり、信仰、または神とは、日々の生活の出来事との関係をなくしてはあり得ず、それらは、日々の生の中で再編成されると主張しているのである。ゆえに、信仰とはただの理性的なものではなく、重唱などによって母語ですべての人に語りかける中にあると考えていたのだ。自身がそこに参加するという経験となる賛美歌の作成に、グルントヴィが力を入れたことは必然的であったといえる。

宗教革命によって、プロテスタントの側が厳しく批判したのは、教会の官僚的な性格であった。もともと、人々が集まるための場所として重要な意味を成すはずの教会が、いつしか組織が先行する形となり、教区制などで人々を縛っていた。また、免罪符の問題など、聖書に書かれていないことは根拠のないことである、と非人間的な集合体になってしまっていた教会を批判したのである。そのような状況に対してグルントヴィは、振興は日々の生活の中で高められると考えていたため、教会は聖なる精神によって解き放たれた人々の信仰の場として重要であると考えていた。ルター派と同様にグルントヴィも、聖職者や教皇よりも、キリストそのものの存在、または語った言葉を重視しているが、その上で、キリストによって語られた言葉を伝え、みなで経験する場所としての教会や、語る役割としての聖職者の存在に価値を見出したといえる。ゆえに、ルター派の人々が教会そのものや聖職者を批判したのに対し、グルントヴィはその必要性を認めているという点で、カトリック的な性格を帯びていると考えられることもある。

A.M.Allchinは、グルントヴィの宗教観のカトリックとの親近性について、典礼に対する考えについて考察している[12]。カトリックが重要視する秘蹟、儀式といったものは、宗教改革によってその必要性が薄れ、かげりを見せ始めていた。その結果、18世紀の終わりには、グルントヴィが幼いころに経験したような典礼の経験は、多くの子どもたちにとって閉ざされたものとなっていた。例えば、アングリカン（イングランド国教会）では、matins（朝の祈り）が聖餐式に取って代わり、そこで賛美歌が歌われることはなかった。また、ローマカトリック教会では、典礼はラテン語で行われ、自国語

[12] A.M. Allchin. “Grundtvig: An English Appreciation”. *Worship,* vol.58. (1984). 参照。なお、著者 Allchin は明らかにカトリック信仰の立場から議論を進めているが、その論理はやはり傾聴に値する。

での説教は禁じられていたため、一部の人々しかそれを理解することができなかった。さらに、カルバン派の教会では、典礼は基本的に廃止されていた。

グルントヴィは、典礼によって、人々が三位一体の中にいるという感覚になることを重視していたと言える。これは明らかに、当時のルター派と対立する考えである。つまり、グルントヴィにとって重要なのは、聖職者自身でも、聖書自体でもなく、神の語った言葉が、人々の周りに生きた言葉として集まってくる、また人々がそれを共有する（経験する）ということであったのである。また、グルントヴィは、詩によってこそ、復活したキリストの存在を生き生きと実現できると考えており、それは、説教において語られることによって、その瞬間に秘蹟が起こるということを意味し、カトリックのサクラメントという考えとも性質を異にするものである。

グルントヴィは、自身が聖職者でありながら、ルター教会を批判し、彼らの反感を買い、それによって聖職を追われることになるが、グルントヴィにとって、歴史においても反省（reflection）の時代に来ている今、デンマークの本来の姿を取り戻すためには、教会改革、人々の信仰の問題の解決が不可欠であったのである。

Ⅲ．グルントヴィの愛国思想

当時のデンマークは、地理的にも、文化的にも、ドイツ、フランス、イギリスなどの近隣諸国からの影響を強く受け、“デンマーク的なもの（Danishness）”が正しく評価、理解されていない状況であった。特にスレースヴィ（Slesvig）など、ドイツと陸続きであるユラン半島の南部では、多くの人々がドイツ語を話し、デンマーク的なるものの存在が危ぶまれていた。しかしグルントヴィは、自身の古英文学研究から得た、デンマークは神から選ばれた特別な国である、との歴史的洞察により、デンマーク（または北欧）の重要性を確信していた。

グルントヴィは、デンマーク的なるものを熱愛し、その自身の愛を特別な愛（Partiality）と呼んでいる[13]。既述の通り、このデンマーク的なるものへの特別な愛が目覚めたのは、英文学の研究のために、イギリスに渡り、デンマークを外から（アングロサクソンのレンズを通して）眺めたときであったという。

本章では、グルントヴィの愛国主義思想（Patriotism）について考察するが、ここでいう Patriotism は、（特に近代以降）私たちが理解している愛国心とは異なる概念である。無論、このような考えが歪曲して伝わり、デンマーク国外では、グルントヴィの思想が国粋主義として輸入されている場合も少なくない。しかし、Mark Brandshaw Busbee は、「グルントヴィは国民を、歴史的、精神的目的に目覚めさせようと望んだが、それは、デンマーク国内の、精神的健全性のための関心であり、デン

[13] N.F.S. Grundtvig. “The Danish Four-leaf Clover or A Partiality for Danishness”. (1836). Broadbridge. *The School for Life,* p.128.

マークの影響を海外へ広げようとするものではない。」[14]と強調している。さらに彼は、Finn Abrahamovitz のグルントヴィの伝記の一文を引用し、グルントヴィの愛国主義に関して説明を加えている。

> グルントヴィは国粋主義者ではなく、決して人種差別主義者ではなかった。彼は、それが私たちにとって最善であるから、私たちはデンマーク人にならなければならないと考えた。“ローマの思想”や“ドイツの帝国主義”を非難したとき、それはデンマークのものでないからであった。ゆえに、わたしたちにとってはよくない、外界の印象に影響されるべきではないということを意味した[15]

Kemp Malone によると、グルントヴィは、北欧神話に見られるように北欧の人々は昔から素晴らしかったが、７世紀にキリスト教化が始まったことにより、それが最高潮に達したと考える、独特の歴史観を有している。その素晴らしい時代を取り戻すために必要な要素として、”The Danish Four-leaf Clover or A Partiality for Danishness”の中でグルントヴィは、国王（King）、国民（People）、祖国（Fatherland）、そして母語（Mother-tongue）の４つを示し、そのそれぞれが正しい形を取り戻すことがデンマーク的なるもの（Danishness）を成立させるために必要であると訴えている。

Jindra Kulich は、グルントヴィ思想の中心概念は、生きた言葉（the Living Word）と国民性（Folkelige）であり、特に後者の“Folkelige”というデンマーク語について、直訳が難しい特別な言葉であると説明している。これは狭い意味での国家主義とは異なり、何世紀にも亘り発展してきた民衆の伝統とその伝統に基づく感情を含むものである[16]。つまり、グルントヴィは“Folket”を重要視していたが、それは単なる同一の国籍等を有する形式的な国民という概念とは異なり、そこにいる人たちがそう感じざるをえないようなもの（そういった感覚）であると言える。小国となり、汎用性が低いデンマーク語を共有する、という事実が、“Folket”としての意識を作る上で重要な役割を果たすことは言うまでもない。
それは、ただ祖国の歴史や現状を知識として知ることではなく、それを理解し、自分の口で（母語で）語ることができるということであったのである。そのための場所として、新たな学校の必要性が高まっていたのだ。

---

[14] Mark Brandshaw Busbee. “N.F.S. Grundtvig’s Interpretation of ‘Beowulf’ as a living heroic poem for the people”. University of California Davis. (2005), p.50.
[15] 同上、pp.50-51.
[16] Jindra Kulich. “The Danish Folk High School: Can it be transplanted? The success and failure of the Danish Folk High School at home and abroad”. *International Review of Education*. Vol,10. (1964), p.418.

Ⅳ．グルントヴィの教育思想

牧師の家系に生まれ、聖職者になるべく育ったグルントヴィが、その教育思想家としての頭角を顕し始めたのは、1836年頃からであるといわれている。その年彼は、“The Danish Four-leaf Clover or A Partiality for Danishness”を出版しており、それは、彼の初の教育に関する論文集として知られている[17]。既述のように、当時デンマークでは、スレースヴィ（Slesvig）の領土問題が顕在化していた。そこでグルントヴィは、教育の改革、または新しい学校の創設によって、彼が愛してやまないデンマーク国家、またはデンマークらしさを守ろうと考えたのである。

彼の教育思想は、彼の宗教観と強く関連しているが、Jindra Kulichは、グルントヴィは、自身が通ったオーフスのラテン語のグラマースクールでの経験を反面教師として、新たな学校を構想するようになったと説明している[18]。そこでまず初めに、彼が“死の学校” と呼んだ学校の特徴について、さらにこれとは対照的な、生のための学校について以下に考察する。

１．死の学校と生のための学校

グルントヴィは、当時の学校を死の学校（School for Death）と呼び、その学校では死んだ言葉であるラテン語が使われており、その結果、学校へ行くことにより人々の精神は破壊されてしまっている、と指摘している[19]。“死の学校”は、発達段階に即さず、幼いころから規則が教え込まれる、「文字・識字の製造所」[20]（＝刷り込みを行う場所）であると批判しているのである。さらに、そこで行われている教育は、「子どもに順序、静かさ、反省、古い世代の知恵」[21]を植えつけることを目的としており、これはまさに村井の言う、“よさの決め付け”が行われている場所であり、それにより、子どもの生活と学びは完全に分解されてしまう、と危惧しているのである。グルントヴィは、近代化に伴い、民衆教育が普及しつつあったデンマークで、その普遍化による被害の拡大を想定し、教育の改革の必要性を訴えたのである。さらに、グルントヴィは、そのような学校でラテン語を学ばされている人々を日々の奴隷（daily slavery）と例え、学校が人々の尊厳性を損失させることに加担していると非難している。「人生の要求のために生活を実際のままに捉え、生活に光を当て、その有用性を促進することに努めなければならない」[22]というのがグルントヴィの考えであった。

---

[17] S.A.J. Bradley. *N.F.S. Grundtvig—A life recalled*. Aarhus University Press. (2009), p.48.
[18] Jindra Kulich. “The Danish Folk High School: Can it be transplanted? The success and failure of the Danish Folk High School at home and abroad”. *International Review of Education*. Vol,10. (1964), p.417.
[19] N.F.S. Grundtvig. *A Grundtvig Anthology: Selections from the Writings of N.F.S. Grundtvig 1783-1872. James Clarke Company*. (1984), p.66.
[20] 同上、pp.70-71.
[21] 同上、p.66.
[22] N.F.S. Grundtvig. *A Grundtvig Anthology: Selections from the Writings of N.F.S. Grundtvig 1783-1872*.

そのような伝統的な学校に対して、グルントヴィは、生のための学校（School for Life）を構想している。生のための学校とは、「人生を精一杯生きるための欲望や能力を深め、目覚めさせる学校であり、様々な人と向き合う状況の中で、仲間意識を醸成する場所であり、さらに、生きた言葉、つまり母語によって生徒の覚醒を助ける場所」[23]である。それは、何らかの資格のためや、将来の暮らしのための職業訓練教育とは異なる、今の人生に焦点を当てた教育であるといえる。生のための学校において最も重要なことは、もちろん、“生きた言葉”で語られるということである。

グルントヴィは、ラテン語の鎖からデンマークを解放することを再三訴えているが、これはラテン語を追放するべきであるという議論ではない。彼は、「デンマーク国内であっても、また、一人の人間にとっても、２つ以上の言語を有する許容力がある。しかし、ラテン語とデンマーク語の両方を有することができるとしても、それらの関係は、犬猿の仲であり、そこには主従関係が生まれてしまう」[24]と考えていたのである。前述のように、生命の言語であるはずの母語が、大学においてはラテン語の奴隷になり、さらにその他の学校においても、書かれた言葉の奴隷となってしまい、本来は語られることが大切であるにも関わらず、書かれることが大切であると考える人々の錯覚に対し、警鐘を鳴らしている。現在の学校では、人々の口は、自由な語りを邪魔し続ける悪いラテン語によって縛り付けられているため、自由な教育と母語の習得は、ただ紙の上だけで行われている。さらに、子どもたちは、学校教育を受けても、ラテン語の読み書きを完全に習得できないだけでなく、デンマーク語も満足に書いたり話したりできない状態になってしまい、その結果、「自身の考えや感情を表現するための、自然な生の源が枯れてしまう」[25]という現状に対し、ラテン語の奴隷になるのではなく、ラテン語を支配し、私たちに従属させることができるかどうかが問題となると考えたのだ。加えて、このまま今の学校制度を継続していくならば、人生と学校の溝はどんどん深くなり修復不可能になるが、今なら詩人がそれを結ぶことができるとして、生きた教育における、詩人の重要性についても言及している[26]。

グルントヴィの構想したような新しい学校は、農民だけでなく、デンマーク国内のすべての人々に利益となる、と説明している。当時の学校（“死の学校”）に対して、「新しく創設しようとしている生のための学校では、死の学校で強制されているものや、それらに関するものは排除されるべき」[27]であり、それは、若い民衆が教育と啓蒙によって成長することができるような場所になるべきである、

James Clarke Company. (1984), p.71.

[23] Jindra Kulich. “The Danish Folk High School: Can it be transplanted? The success and failure of the Danish Folk High School at home and abroad”. *International Review of Education*. Vol,10. (1964), p.417.

[24] N.F.S. Grundtvig. “The School for Life and the Academy in Sorø”. (1838). Broadbridge. *The School for Life,* p.210.

[25] 同上、p.210.

[26] N.F.S. Grundtvig. “The School for Life and the Academy in Sorø”. (1838). Broadbridge. *The School for Life,* p.213.

[27] N.F.S. Grundtvig. “The Danish Four-leaf Clover or A Partiality for Danishness”. (1836). Broadbridge. *The School for Life,* p.143-144.

というのがグルントヴィの考えであった。

２．“Det levende Ord（生きた言葉）”の理論について

グルントヴィが、“Folket（国民）”と関連的に発展させた理論として、“Det levende Ord”（生きた言葉）がある。彼が構想した“生のための学校”では、この“生きた言葉”の存在が非常に重要な役割を果たしている。彼は度々、語られる言葉というものの重要性について主張し、その対となる書かれた言葉を批判しているが、グルントヴィが単に語られる言葉ではなく、生きている（levende）という際に、それは何を表しているのか。

グルントヴィは、他の聖職者と同様の学校教育を受けてきたが、前章で説明したように、彼の宗教観は独特のものであったといえる。彼は、人々は「創造主、救い主、聖霊の言葉の中に、神を見つけることができる」[28]と考えており、生きた言葉という概念について、次のように説明している。つまり、「キリストの語った言葉、さらに、予言者や使徒の言葉を起源とする、人間の身体的、精神的生の中心的な表現」[29]である、と。

さらに 1811 年、グルントヴィは言葉について重要な区別を設けている[30]。それは、神の言葉を真に純粋で神聖なものとして考え、人間の言葉は、人を介しているため、部分的にその純粋性、神性さを失っているというものである。しかし、グルントヴィは人々の言葉の中に価値を認めていることに変わりはない。語られる言葉を書かれた文字と対比させ、それらに比べればより事実であり、“生きている”と説明しているのである。

さらにグルントヴィは、Beowulf などの古代詩の中に、国民（the Folk）によって表現された生きた言葉が表されているとし、それらの詩に宗教的な意味を認めた[31]。彼は、Beowulf を、「デンマーク人の偉大さと古代の遺物を証明するもの」[32]であると考えていたのである。ゆえにグルントヴィは、Beowulf から、デンマーク（またはデンマーク人）が、現代の苦難の状況を打開する可能性を予期していたのである。

以上、グルントヴィの“生きた言葉”という理論が意味するものは、まず、キリストがかつて語った言葉であるということ、さらには、それが、人々の言葉を介して語られるということ、そして、それらが特権階級の人々だけでなく、国民（Folket）の口で、母語によって語られるということであったのである。彼がラテン語を徹底的なまでに批判した理由も、ラテン語はもはや誰も語らない本の中だけの言葉であり、そういった意味で、それを死んだ言語（Dead language）として批判し、そのよ

---

[28] 同上、p.16.
[29] 同上、p.16.
[30] 同上、p.18.
[31] 同上、p.7.
[32] 同上、p.8.

うな言語によってでは、真の信仰は伝えられないと考えたのである。

このように、グルントヴィは生きた言葉（Det levende Ord）と国民（Folket）という理論を根底に、自身の教育思想を組み立てていったのである。グルントヴィは、“The Danish Four-leaf Clover or A Partiality for Danishness”の中で、教会の時代が終わり、学校の次代が到来していると述べ、教区制の廃止と同様に、国民の生きた言葉を形にする場所としての国民高等学校の建設が急がれていると、訴えている。

Ⅴ．近代化と教育

グルントヴィが生きた時代、デンマークは既述のとおり“黄金時代”と呼ばれ、それは文化面のみならず、工業面においても同様の変化をもたらしていた。1820 年代には、H.C. Ørested が電磁学を開発し、アルミニウムの生成に成功。1828 年にはデンマーク初となる蒸気機関車が造られ、その翌年には、スカンディナビア初の製紙機械の使用が始まっている。これらに伴い、人々の生活にも変化が生じ始めていた。

さらに、1848 年のヨーロッパ革命の影響を受け、デンマークにおいても絶対王政が終わりを告げ、民主化が進んでいくことになるのであるが、その一方で、スレースヴィの領土問題が示すように、ヨーロッパ内ではいまだ民族対立の問題が残されていた。のみならず、1848 年の革命によって顕在化した階級間格差の問題により、特に産業革命以降、マルクスなどを中心として、国家という枠を越えて万国の労働者が団結しようとする力、つまり、社会主義が高まりを見せていた。

このような激動の中、グルントヴィは、イギリスにおいて、より工業化、近代化された生活を直接に目の当たりにしている。彼は帰国後、デンマークもイギリス以上の栄華を極めることができると考えたのであるが、しかし、それは決してより高度な工業化を意味するものではなかった。訪英を通してデンマークへの愛国感情をより強くしたグルントヴィは、デンマークの国民（folket）が、その本来の姿（Danishness）を取り戻すことこそ重要であると考えたのである。では、グルントヴィは、そのような状況における教育（または学校）の果たす役割をどう考えたのか。

１．近代化と国民高等学校

前章で考察したとおり、彼が“生きた言葉”という場合に、それは単に母語によって語られる、つまり、母語を中心とした教育を行う学校が成立する、というだけでなく、人々の間に生き生きと神の存在が表れる、つまり、人々の生が神によって啓蒙されるということも表している。ここに、グルントヴィ特有の人間観が表れているといえよう。つまり、グルントヴィの重要視した“Folket”という

理念も、それは国家に仕える家来（subject）では決してなく、国家にとって重要な一構成員と捉えている。ゆえに、彼らが正しく啓蒙され、“声”を得ることが必要であったのである。また、グルントヴィは、牧師や法律家が上、農民が下などとは決して考えなかった。その証拠に、グルントヴィは、彼の構想した学校を具現化しようとする、見ず知らずの貧しい青年クリステン・コル（Christen Kold）に、支援を快諾している。グルントヴィが考えた近代化とは、上からの、“一定のよさ”を国民に押し付けるものではなく、人々の生を真に啓発することが目的とされていたと考えられる。それは、グルントヴィが構想した学校が、農民のためだけの学校ではなく、しかもその学校においていわゆるリテラシーを中心とした教育を行うべきではないとの主張からも、推察できるであろう。グルントヴィは、ラテン語主義者（Latinist）たちにとっても、生きた学校が重要であると考えたのである。それはもちろん、自身をデンマーク人として認識する人々がいなければ、デンマークという国はあり得ないからであり、グルントヴィは、彼らがデンマーク語を話し、デンマーク語で考え、祖国を愛するためには、庶民との生きた交流をする必要があると考えたのである。そして、国民高等学校こそがその場になることを望んでいた。

グルントヴィは、Beowulfなどの古英文学の研究を通して、デンマーク人の（神話における、神に選ばれた英雄としての）本来の姿を確信していた。彼は、母語の重要性を訴え、デンマークの人々（Folket）の精神を高め、アイデンティティを形成し、結果としてデンマーク国家の設立に大きく寄与することとなるが、彼は決して、教育により、人々を支配しようと考えたのではなかった。歴史的、宗教的観点から、デンマーク人や祖国をあるべき姿に戻したい、という思いであり、それは、国家主導のもと、人々を操ろうとしたり、他の民族を排斥したりする思想とは決して相容れないものであったのである。

近代化を行う上で、デンマークという国家を成立することは第一の条件であり、無論、グルントヴィにもその考えがあったに違いない。では、そのためにはどうすればよいのか。それはまさに、人々がそこに属している、と感じることが非常に重要であった。1814 年以降、民衆学校での教育の義務化により、多くの人々が教育を受ける機会を得たが、それが上からの押し付け、つまり誤った啓蒙思想により推し進められていたことに対して、グルントヴィは、強制的に何かを学ばせるということについて反対し、当時の啓蒙主義の、暴力的、強制的、暗記学習は人格を崩壊してしまうとして、批判的している[33]。さらにそこには、母語の問題が並存しているのだ。

前述のように、“南ユラン”と呼ばれる地域では、多くの人々がドイツ語を使用しており、それを母語にするべきだという考えもあったと言われている。最初の国民高等学校が、この“南ユラン”に当たるロディン（Rødding）に設立されたのも、偶然ではない。言語（母語）をどう定めるのかというのは重要な問題であり、これは近代化において、どこの国でも同様に直面してきた課題であるとい

[33] Edward Broadbridge. *The School for Life: N.F.S. Grundtvig on Education for the People.* Aarhus University Press. (2011), p.77.

えよう。島国である日本でさえ、その近代化の過程で、言語の問題は外すことができないものであった。デンマークでは日本とは様相が異なり、大陸内における民族の問題と言語の問題、さらには宗教的な問題が不可分に結びついていた。デンマーク人である、ということに特別な宗教的な意味を附与していたグルントヴィにとって、母語としてのデンマーク語の確立は、最も重要な課題であったと言えよう。

1814 年のキール条約によってノルウェーを失って以降、「エーレンシュレーヤー（A. Oehlenschläger, 1779～1850）率いるデンマークの詩人たちは、デンマーク国家、デンマークの国民の概念を再定義」[34]するため、古代のスカンディナビアの歴史的、神話的出来事を劇化し始めていたのである。ヘルダーやフィヒテの哲学のみならず、彼らからも影響を受けたグルントヴィは、愛国的次元を増していった。さらにグルントヴィの“生きた言葉”の理論は、民衆の精神的啓蒙（”Folkeoplysning”民衆のための啓蒙）に向けての比喩になった。グルントヴィにとって、「Folkelighed という言葉は、国家や国民（folket）のすべての特徴と、精神的なものと、知的な遺産に関するものを含み、Folke は理想主義的やロマン主義的ではなく、すべての社会的集団に共通の言葉として組み立てられて」[35]おり、詩作や歴史の学習を通して、この国民的なもの（folkelighed）を共有することによって、人々のデンマーク人としての意識を涵養しようと努めたのである。グルントヴィと同時代を生き、グルントヴィの思想に影響を与えたフィヒテは、国民の覚醒を国家のエリートの責任とした[36]。グルントヴィはさらに、農民だけでなく、知識人や官僚によってもこの祖国への愛と母語へ尊敬を養わなければならないと考えたため、ここに、国民高等学校の必要性が生じるのである。

加えて国民高等学校は、国民を啓蒙する場所であるとともに、母語や、デンマーク的なもの（Danishness）の継承する役割も果たしていたのである。当時のヨーロッパ情勢から考えると、デンマークは 1814 年にノルウェーをスウェーデンに割譲し、さらに 1848 年にはスレースヴィ（Slesvig）を失うなど、国家としてのデンマークは最小となり、いつ無くなってもおかしくない状況にあったと言える。その中で、グルントヴィが最も重要であると考えたのは、デンマークの精神（Danishness）である文化を残していく、ということであった。ゆえに、母語を使い、祖国の歴史を学ぶ国民高等学校は、その面においても非常に重要な役割を果たしたのである。国の形がどのように変わっても、デンマークの精神性を守っていくこと、それを本来の姿に戻すことが、結果的にデンマークを守っていくことになると考えていたのであろう。

---

[34] 同上、p.34.
[35] 同上、p.34.
[36] 同上、p.35.

結論

以上のように、グルントヴィがデンマークに与えた影響は甚大である。それは、同時代を生きたアンデルセンやキェルケゴールをも上回ると言っても過言ではないであろう。Mark Brandshaw Busbee はグルントヴィを次のように評価している。

> 1825 年に名誉毀損で訴えられ、聖職を追われ、検閲下にあっても、説教と出版を続けたグルントヴィは、1830 年代と 40 年代に教育観を表現することにより、また、1850 年代と 60 年代にデンマーク議会に参加することによって、日々の生活を支配している基本的な構造やイデオロギーを変化させた[37]。

グルントヴィが考えた、デンマーク国家の発展とは、古代の神話に書かれているように、国民（フォルケ）がその生を存分に生きることができるようになることであった。それは、上からの改革ではなく、一人ひとりの国民の意識（heart）の改革であったと言える。

中世から近代への変化は、神中心の世界から、人間中心、科学中心の世界への変換を伴った。その中で、公教育においては、神または宗教の問題は排除されていった。しかし、“神の言葉”が学校に集う人々の言葉の間に宿るとして、グルントヴィはそこにいまだ宗教的な意義を見出していたと言える。グルントヴィは、一般に、教育において対話を重要視していると言われ、筆者も自身の学士論文において、そのような特徴づけを行ったが、その対話とは、単なるおしゃべりではなく、神の顕現を伴う、というのがグルントヴィの独特の考えであることが今回の研究を通してより明らかになった。

近代になり、近代教育制度の整備は、今まで機会に恵まれなかった多くの人に教育の機会を開いた。しかしそれは、ある意味では強制を伴う場合が多くあったことも確かである。そこで、重要になるのは、教育をどのような目的の下に置くのか、ということであろう。グルントヴィにとって教育（国民高等学校）は、宣教の手段でも、政治のためのものでもなく、まさに、デンマークの本来の姿を守るための、デンマーク人のための教育であったと言えるのではないだろうか。

グルントヴィが果たした役割は、今まで、教育学者によっては教育者として、神学者によっては聖職者として切り離されて考えられてきたが、彼が直接に影響を及ぼしたのは、“デンマーク人”を作り上げる上で重要な母語の捉え方、人間の見方であったように思われる。それらがもちろん、当時の教会観、学校観などに大きく影響を与えたことは言うまでもないが、グルントヴィの果たした功績として最も顕著なものは、この点にあるのではないだろうか。すなわち、デンマークがプロイセンとの

---

[37] Mark Brandshaw Busbee. “N.F.S. Grundtvig’s Interpretation of ‘Beowulf’ as a living heroic poem for the people”. University of California Davis. (2005), p.2.

戦争に敗れ、その領土の３分の２を奪われ、至上最小の国となった当時、ドイツを含む大陸からの圧力に負け、大きな流れに飲み込まれることなく、独自路線を貫き、“デンマーク”という近代国家を形成する上で非常に大きな役割を果たしたのである。現在のデンマークが、EU に加盟しながらもその独自の路線を貫いているのは、この理由によるものであろうか。このような選択が果たして“良い”選択であったのか、というとそれはまた別の問題であり、近代化という意味ではヨーロッパ大陸においてもいまだ大きな遅れをとっているといわざるを得ない。しかし、近年の幸福度調査が示すように、デンマークの人々が今の生活、デンマーク人であるということに対して、満足している、それを幸せに思っているということもまた、真実である。

現在、日本においても高等教育は大きな議論の的である。一昔前のように、大学を出ることがイコール優良企業に入り、豊かな生活を送ることができる、という方程式が崩壊し始めている現在、何のための大学か、また、大学では教養と専門のうち何を教えるべきであるのか、さらに、卒業後の進路との関連（アーティキュレーションの問題）など、高等教育は改革を迫られている。その中で、やはり、短期的に、雇用を回復していくなどということよりも、人々が満足して幸福な生活を送っていくためには、一体何が必要であり、それらを提供するために、大学が果たすべき役割とは何であるのかを、真剣に吟味する必要があるであろう。国民高等学校は、日本の大学とは同じ地位は与えられておらず、先述のように何の資格も与えることはできないが、日本の大学教育がこれらから学ぶところは非常に多いように思われる。“即戦力”や“コミュニケーション力”など、社会に出てから必要な力としてさまざまに議論が交わされているが、そもそも、何のために学ぶのか、何のために働くのか、あえて大きな言葉を使うと、“人生の目的”と言ったものが定かでない学生や若者たちにとっては、そもそも問題はそこにあると考えられる。

日本も現在、大きな岐路に立たされている。従来通り、アメリカや欧米諸国の真似をする、または後を追いかけるやり方が見直されるときが来ているのではないだろうか。人々が真に満足できる社会を形成していくため、国を富ませること、1 位をとること、それらのみが本当に正しい選択であると言い得るのか。デンマークが歩んだように、第三の道という選択もありうる。その上で重要となってくるのは、どのような国を作りたいのか、また、どのような国民を育てたいのか、というグランドプランとも言うべき長期的な計画である。しかし、その計画を作るのは、一部の権威をもった人々では不可能であろう。グルントヴィが農民に光を当て、国を再建していったように、日本も本当の意味で日本を支えている人たちの意見に耳を傾け、真摯に行動に移していく必要があるのである。デンマークと日本では国のあり方、規模、国民性など、違いが多くあり、直接的に比較することは不可能であるが、このような小国からも、アメリカのような大国から学ぶ以上のことを学ぶことができるのではないだろうか。また、近代国家を急ピッチで築いてきた日本が取りこぼしてきたもの、または、あえて気にも留めなかったものに、実はこれからの改革に必要なヒントが隠されているのではないだろうか。

引用文献・参考文献

- 小泉信三、「民族と階級」、『共産主義批判の常識』（『小泉信三全集』第 10 巻（文藝春秋社、1967 年）
- 佐々木正治、『デンマーク国民大学成立史の研究』、風間書房、1999 年
- 寺田治史・白石大介、「デンマークにおける教育事情（II）―『生の教育』の実態を垣間見る―」、武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科研究誌 第 5 号、1999 年
- 橋本淳、『デンマークの歴史』、創元社、2004 年
- ハル・コック著、小池直人訳、『グルントヴィ　デンマーク・ナショナリズムとその止揚』、風媒社、2007 年
- 村井実、『教育と民主主義』、東洋館出版社、2005 年
- A.M. Allchin. "Grundtvig: An English Appreciation". *Worship,* vol.58. (1984).
- Steven Borish. "N.F.S. Grundtvig as Charismatic Prophet: an analysis of his life and work in the light of revitalization-movement theory". *Scandinavian Journal of Educational Research*, vol.42. (1998).
- S.A.J. Bradley. *N.F.S. Grundtvig—A life recalled*. Aarhus University Press. (2009).
- Mark Brandshaw Busbee. "N.F.S. Grundtvig's Interpretation of 'Beowulf' as a living heroic poem for the people". University of California Davis. (2005).
- Britannica Academic Edition.
- Edward Broadbridge. *The School for Life: N.F.S. Grundtvig on Education for the People.* Aarhus University Press. (2011).
- E.F. Fain. "Nationalist Origins of the Folk High School: the Romantic Vision of N.F.S. Grundtvig". *British Journal of Educational Studies*, vol.19, (1971).
- N.F.S. Grundtvig. *A Grundtvig Anthology: Selections from the Writings of N.F.S. Grundtvig 1783-1872*. James Clarke Company. (1984).
- N.F.S. Grundtvig. "Education for the State". (1834). Broadbridge. *The School for Life*.
- N.F.S. Grundtvig. "The Danish Four-leaf Clover or A Partiality for Danishness". (1836). Broadbridge. *The School for Life*.
- N.F.S. Grundtvig. "The School for Life and the Academy in Sorø". (1838). Broadbridge. *The School for Life*.
- Jindra Kulich. "The Danish Folk High School: Can it be transplanted? The success and failure of the Danish Folk High School at home and abroad". *International Review of Education*. Vol,10. (1964).
- Kemp Malone. "Grundtvig's Philosophy of History". *Journal of the History of Ideas*, vol.1. (1940).

http://www.britannica.com/EBchecked/topic/436527/Oxford-movement?aid=kt6FaqzJUQvLRf0cj0B&cameFromBol=true（2011 年 12 月 27 日）

- Comparing Countries' and Economies' performance.

http://www.oecd.org/dataoecd/54/12/46643496.pdf（2012 年 1 月 4 日）

- The Royal Danish Collections.

http://dkks.dk/christian-viii-coronation　（2012 年 1 月 2 日）